

女の奇妙な復讐

とんだ玉三郎

小川慶太郎は江戸製紙という中堅の製紙会社に勤めていた。仕事一筋というほど、我を忘れて仕事に没頭するタイプでもなかった。また、家族サービスはそこそこにしたが、徹するということもなかった。これといった趣味もなく、仲間と時には酒を酌み交わして憂さ晴らしをするという程度で典型的な当世のサラリーマンであった。

その彼に生活の転機が訪れたのは、六十五才の時だった。役員にはなれなかったが、それなりのポストまで上り詰めた彼には退職しても、第二の人生として、子会社の役員のポストが約束されていた。しかし、会社の経営が厳しくなり、子会社に留まることは出来なくなり退職することになった。

行く場所がなくなったことに戸惑った。これといった特技もない男にこの年でつける職業は、マンションの管理人かビルの警備員くらいしかなかった。今更、働く気はさらさらなかった。年金と退職金、それに親の遺産を切り崩していけば、生活には困らない。

しかし、家にずっといると、一日中、女房と顔を突き合わさないといけない。先輩の中には、定年を機に妻から離婚を言い渡された者もいた。家族サービスをなおざりにしたわけでもなかったのですがそんなことはないとは思っている。でも、毎日、テレビの前でゴロゴロしていたのでは、女房に愛想をつかされる。とにかく、何かやることだ。一念発起して、打ち込める趣味をなにか持つことにした。手始めにカルチャー教室、読書、ゴルフ、釣りといろいろチャレンジしてみたが、どれもものにならなかった。そんな時に娘の路子に「素人が短編小説を書いてお互いに評論しあい、作家の先生からアドバイスをもらえる会」がある。そこに入って、小説書きに挑戦してみたらと言われた。学生時代に恋愛小説もどきものを書いたことがあると言ったのを覚えていたらしい。お粗末なものを書かれても会の主催者に失礼なので、書いたものを日本文学を専攻していた娘にチェックしてもらい合格したら、入会するという条件でやってみることにした。

定年後になにか趣味を持つといろいろとチャレンジしたことを思い出しながら書いてみた。学生時代以降、小説らしきものを書いたことがなかったが、

我ながら、うまく書けたと思った。

近所に住んでいる娘の路子が娘の紗香を抱いて、やって来た。

「どう、小説、書けたの」

「書いたぞ。我ながら、なかなかのものだ」

「お父さんは、のう天気でいいわね。小説って、最初からうまく書けるものではないわ。ところで何を書いたの」

「定年になってから、いろいろ趣味を作ろうと歩き回っただろう。それを思い出しながら書いたんだよ」

「で、タイトルは何にしたの」

「『趣味探し』だ。いいだろう」

「タイトルがいいって、なにを言ってるの。じゃあ読んでみるから、メールで私のパソコンに送っておいて」

慶太郎は書き終えた小説をメールで娘に送って、評価を待つことにした。

翌日、娘がやってきた。

「どうだ。俺の小説は」

「なかなか、面白くうまく書けてる、というか、お父さんのキャラそのままね。

軽いタッチの私小説というジャンルね。構成などは粗削りだけれど、最初にしては、なかなかいいよ、とりあえず、合格点だわ」

「これから、小説書きを生業にするよ。そのうちに芥川賞でも受賞して、皆をあつと言わせてやるよ」

「言うのは只だからいいけど、芥川賞なんて、誰でもとれるものじゃないわよ、年にたった二つの作品しかもらえないのよ。毎年一万点の作品が受賞するのなら、お父さんのも入るかもしれないけどね」

慶太郎はもう、一端いっぽうの小説家になった気でいた。

「さつそく、翔太さんから、お義父さんに話してもらいわ。入会のこと」

翔太は娘の夫で彼の父親は出版社に勤めていたが、その同僚で「素人小説の会」を主宰している人がいるのだった。慶太郎は翔太を通じて主宰者に入会したい旨を伝えてもらった。

主宰者の高山竜太郎は慶太郎の入会申し込み書と書き上げた小説「趣味探し」の原稿を受け取った。

「六十五才か。その年で初めて書くとは珍しいね。会社勤務が長かったようなのでサラリーマンものを書いたら面白いかもしれない。彼の作品は本人の体験

談そのもののように見えるが、もし創作ならなかなかのものだね」

それを聞いた会の世話人の篠田晶子は言った。

「自分の周りの出来事を淡々と書きますね。創作ではないでしょう。でも、わかりやすく、面白く読みました」

「小説としての構成は初めて書いたにしては面白そうな作品だね。ただ、これがフィクションなら小説と言えるが、ノン・フィクションではね……」

「なかなか、厳しいですね。私小説のジャンルには入るんじゃないでしょうか」
「その領域にはまだまだ達してないよ。だんだん書いていくうちにうまくなるだろう。まずはわかりやすく読めていい」

「入会してもらいましょうね」

「そうだ、この会では異色の存在になるね」

「でも、アドバイザーの秋山先生が何というかです」

「入会者の選考は主宰者に任せると言っていてくれているので問題ないよ」

会の名前は「さつき会」と言った。著名な小説家の作品のタイトルを会の名前にしたら、という話もあったそうだが、まとまらなくて、発足したのが五月だったので「さつき会」としたのだった。二ヶ月に一度、各自の作品を持ち寄り論評しあうとともに、主婦になってから小説を書き出して女流作家となった秋山忍のアドバイスも受けられる。

慶太郎がメールで届いた会員名簿を見ると女性が多い。年齢は伏せてある。女性陣に配慮したのだろう。女性が多いので華やいだ雰囲気のを想像した。会員には勤め人も多いので開催日は偶数月の第三土曜日と決まっていた。慶太郎はその日が待ち遠しかった。

その日が来た。会場は渋谷駅近くの貸し会議室だ。

秋山忍は初心者へのアドバイスとして慶太郎に言った。

『小説を書く』にはストーリーが成り立っていて、なおかつ読者を最後まで楽しませること。この二つを満たして、はじめて小説と言えます。慶太郎さんの作品を読ませて頂きましたが、頭に思い浮かんだことをつらつらと文字に起こしたように感じました。でも、ストーリー性はあります」

「ご指摘、ありがとうございます」

「まず、構想を考える、これがスタートです。『物語のテーマ』の方向性をしっかりと決めておかないと、ストーリーがあっちにいたり、こっちにいたりして一貫性がなくなってしまいます。また、独りよがりになって、自分だけわ

かればいいと思って書く人がいますが、小説は人に読んでもらうものだという
ことを必ず念頭においてください」

慶太郎は頭に浮かんだことを書いたに過ぎなかったので、難しさを改めて知
った。

「また、ジャンルを絞ることも必要です。例えば、時代小説、推理小説、恋愛
小説、SF、それに軽いタッチの娯楽小説ライトノベルというものあります。
また、初心者はいろいろなものに挑戦してみて、得意とする分野を見つけるの
もいいでしょう。憧れの作家がいれば、その人の作品を読みこなして参考にす
るのも方法です」

「私は、ライトノベルといますか、今泉耕作の作品が好きですので参考にし
てみます」

「どのような読者を対象にするかもポイントです。年代や職業などで興味の持
ち方が違ってきます。有名な作家ともなれば、幅広い層に読まれますが、まず
は読む相手を想定したほうが最初はうまくいきます」

女流作家、秋山忍のアドバイスは初心者向けで分かりやすいと慶太郎は思っ
た。

会では各自の作品を事前に読んできて、その感想を述べるが慶太郎は人の作
品を批評できるようなものでもないので、あたりさわりのないことを言った。

会員のひとりである若い女性が慶太郎に親しそうに話しかけてきた。

「小川さんですよ。坂本路子さん、旧姓、小川路子さんのお父さんですよ。

私は路子さんの女子大時代の友達で柏木恵美と言います」

「そうでしたか、路子の女子大時代の友人ですか。寄寓ですね。でもよく私の
ことがわかりましたね」

「小川さんの小説『趣味探し』を読ませて頂きました。これはノン・フィクシ
ョンですよ。そのなかに路子さんが登場したので、これを書いたのは路子さ
んのお父さんだとわかりました」

「やはり、ノン・フィクションだと思われましたか」

「フィクションにしては面白過ぎる、初心者になかなか書けるものではないと
思いました。いや、大変失礼な言い方をして済みません」

「別に謝らなくても宜しいですよ」

「私も最近、この会に入ったのです。私たち、新人同士ですね。よろしくお願
いします」

慶太郎は「なかなか、チャームिंगな子だ。と言っても路子と同じなら三十

路にはなっているのか。それにしても若く見える」と思った。
帰って、妻に訊かれた。

「小説の会、どうでした。続けられそう？」

「初歩的なことから、教えてくれるので、ついていけそうだ」

「そう、よかったわね。これで『趣味探し』もひとまずは終わりね」

「そういくといいがね。小説は『構想』だそうだ」

頼子が趣味の陶芸に出掛けている時に路子が娘を連れてやってきた。

「素人小説の会でお前の女子大時代の友達だという柏木恵美さんという人に会ったよ。いきなり、話しかけてくるからちよつとびっくりしたよ」

路子はちよつと、困ったような顔をして言った。

「そうなの。柏木さんとは女子大卒業以来、会ってもないし、連絡も取り合っていないわ。疎遠な関係よ。よく私のことを覚えていてくれたのね。それにしてもお父さんのことがどうして分かったのかな」

「俺の小説に路子のことを細かく書いたからだよ」

「そのまま、書くからよ。体験談なんかでも少しはデフォルメするものよ」

路子が険しい言い方をどうしてするのかと思ったが、気を取りなおして訊いた。

「親しくないのか」

「女子大時代もぜんぜん親しくはなかったわ」

あの女は少し受け口で男好きのする顔をしていたな。親しく話しかけたりするとところを見ると、俺に気があるのかなと考え出した。

すると、路子が言った。

「お父さん、なに考えてるの。あの子に親しく声をかけられたからって、有頂天にならないでね。噂では一筋縄ではいかない女のようによ」

娘に心のなかを見られたと感じ、慌てて言った。

「何、言ってるんだ。親子ほど、年が違うっていうのに。いい年して、若い子に引っかけたりしないよ」

「そうよね。でも気を付けてね。積極的な子みたいだし、最近、お金目当てで年配の男に近づいてくる女が多いから」

慶太郎は路子がなぜ恵美に敵意を持ったような言い方をするのか、意味が分からなかった。

慶太郎は毎日、書斎のパソコンの前で「構想、構想」とうなりながら、一人

前の小説書きになったつもりでいた。すると、突然、恵美の顔が浮かんできた。こうなると、悪い癖で妄想が始まる。慶太郎は趣味探しをしている時に、カルチャーセンターで会った女のことを思い出した。教室で隣の席に座っていた子で、確か、早見さん、とか言っていた。その子とデートでも出来ないか、と思っていたが妄想し、あえなく振られた。苦い思い出であった。再び、恵美の顔が浮かんできた。妄想はどんどん膨らむ、構想どころではない。そうこうしているとい心伝心なのか恵美からのメールが飛び込んできた。

「小説の構想はできましたか。私のほうは迷っていて、なかなかまとまりそうにありません。お逢いしてアドバイスを頂きたいのですが」

慶太郎は小躍りしそうになりながら、「来た、来た、獲物がかかったぞ」と思った。路子の忠告はすっかりどこかに行った。次には呆れたような顔で慶太郎を軽蔑の目で見る頼子と路子が頭に浮かんだ。「引つかかると妻と娘に愛想をつかされるだけだ。止せ」と思う、すると、もう一人の慶太郎が言う。「バカだよ。『据え膳食わぬは男の恥』というではないか、ばれないように慎重にやればいいんだ。男だろう」すると、もう一人の慶太郎、「お前に隠し事が出来るわけがない。浮気は慣れてないだろうから、やめとけ」。二人の慶太郎の言い合いが続くが、結局、据え膳を食おうということになった。慶太郎も男だ。

慶太郎はメールを打ち返した。ちよつと、下心が丸見えかなとも思った。「そうですね。私もなかなかまとまらず、次回の締め切りも近づき弱っていたところですよ。お互いに知恵を出し合えば、いい構想ができるかもしれませんね。お逢いする場所は適当に決めてください。お返事、お待ちしております」

さっそく、返事が返ってきた。「お返事、ありがとうございます。では、今度の土曜日三時に、渋谷のストーリームのカフェ・ランタンでお待ちしております。ご都合悪ければ、連絡ください」

幸い、その日、頼子は、テニスの仲間を誘われて出かける予定があつて外出の言い訳する必要はなかった。しかし、デートが予想以上に延びて帰ってくるのが遅くなつたら困るので、外出の言い訳を考えて妻に言った。

「今度の土曜日は、久しぶりに昔の会社の同僚と飲むことにしたから、晩飯は要らない」。

「ちよつとよかつたわ。その日はテニス仲間を誘ってショッピングして夕飯も外で済ますつもりだったから、何か夕飯を用意しとかなくちや、と思つてたの

だけど、要らないのならちよっどいいわ。昔の会社の仲間と飲むなんて、珍しいわね」

慶太郎は慌てて作り話をした。

「俺のよく知っている会社の同僚二人が偶然、街で会ってさ、飲みに行ったそう。そこで今度は俺も誘って三人で一杯やろうということになったらしい」

「そう、良かったわね。私はそんなに遅くならないと思うけど、ごゆっくりね」

指定された店は洒落た感じで若者好みのような。恵美は先にきていた。甘いものが好きらしくフルーツパフェを前にして座っていた。同じ物を摂ったらと恵美が訊いたが、慶太郎は甘い物はあまり好きでなかったのでコーヒートを注文した。

「小川さんは、どんな分野が得意なのですか。例えば、恋愛、SF、推理もの、ホラー、時代劇、サラリーマンもの、経済、ライトノベルとか、いろいろあるでしょ」

慶太郎は真面目な問いかけに拍子抜け、やはり、小説の相談をしたかったのかとちよつとがっかりした。

「そうですね。今泉耕作の作品をよく読みますので、やはり、ライトノベルかな」

「ライトノベルもいけれど、恋愛ものなどどうかしら。小川さんの体験談をもとに書いた恋愛ものを是非、読んでみたいなあ」

それは、父親に甘えている子供のような目つきだった。

「恋愛ものなんて体験を積んできた人しか書けないよ」

「あーそうかしら。そんなことないでしょ。随分、いろんな体験をしてきたんじゃないありません」

慶太郎はからかわれているのかと思った。そして、本題に入った。

「構想がまとまらなくて困っているとのことですが、私は今泉耕作の作品を二、三読み返して、参考ににならないかと考えていたところですよ」

『年の差のある男女が不倫を侵す』なんて、ストーリーはどうでしょうかね」

慶太郎は自分が助平根性丸出しで考えていたことをそのまま言われた気がして落ち着かなくなった。その後、とりとめのない話をしたが、恵美はバツイチであることなど自分の体験を面白おかしく話した。そのなかで、父親を早く亡くした所為か、自分の親ぐらいの男性に惹かれる。バツイチになったのも、夫を捨てて、年上の男に走ったから、など細々と話した。

腕時計を見ながら恵美は言った。

「あらもう、こんな時間。小川さんはこれからご予定なにかありますか。もし、差支えなければ、食事付き合っただけでないでしょうか」

慶太郎にももちろん、異論はない。

「いいですよ。毎日が日曜日で予定はありませんから」

「奥さんに連絡しないのですか」

慶太郎はここで妻のことが出てくるのが興ざめであったが、しかたなく答えた。

「いや、今日は妻も出歩いていて帰りは遅いって言っていたから、その必要ないですよ」

「このモールのなかに美味しい韓国ごはんを食べさせるお店があるの。韓国料理、大丈夫ですか」

「いいですよ。韓国料理は好きです」

「本当ですか。良かったあ」

若い子と一緒に食事できると思うと慶太郎はワクワクした。店に入ると恵美は訊いた。

「苦手なものありますか。激辛のものは避けます。私は辛いのがダメなんです」 8

「特に苦手はないです。僕も激辛はダメなんです」

「本当ですか、一緒ですわね。よかった」

恵美はよくこの店にきているらしく、メニューを見で指さしながら数品を注文した。

やがて、ビビンバ、キムチ、チヂミ、チゲ鍋などがテーブルに並んだ。

本場の焼酎も出てきて話も盛り上がった。

恵美は甘党かと思っていたが、酒もけっこう飲んで、顔がほんのり赤くなっていた。

料理も出尽くしてし、酒もかなり飲んだので帰ることにした。

「今日は、僕に驕らせてください。若い女性と楽しく食事させてもらったのでそれくらいさせて下さい」

恵美は自分が誘ったので出すと言ってきたが、最後には折れて慶太郎が払うことになった。勘定を見たら随分安い。客に若者が多いのもうなずいた。

「もう少し、私の話を聞いてくれないですか」

「ここじゃ、なんだから、喫茶店でも行きますか」

すると、恵美はさすがのように言った。

「人に聴かれたくない話なの。貴方だけに聞いてもらいたい。私の秘密の話なの。お願い」

「いや、それは……」

慶太郎はここで言い争って人目を引くのもなんだと思つて了解した。と言うか、半信半疑、なかば、期待して言った。

「わかりました」

「本当ですか、ありがとうございます。私の家は意外に近いんです。うちに行つてゆっくり話します。いいでしょ」

いくら女子大時代の知人の父親とは言え、いきなりはじめて会つたばかりの男を自分のうちに誘うなんていう神経がわからない、しかも、娘とそんなに親しい関係でもないらしい。路子だったら絶対にこんなことはしないだろう、と思う矛盾した慶太郎がいた。

恵美はタクシー乗り場に向かおうとした。慶太郎は慌てて訊いた。

「どこに住んでいるのですか」

「代官山のマンション」

タクシーの中では終始、無言だった。

やがて、マンションに着いた。

恵美がオートロックの玄関のドアを開けて洒落たエントランスを抜け、エレベーターに乗り込んだ。ドアが閉まった。そこはふたりだけの空間だった。十階のボタンを恵美が押した。エレベーターはどんどん上っていく。慶太郎は後悔した。部屋のドアを開けると、怖いお兄さんが出てきて「よくも俺の女にちよっかいを出したな。はした金で済むと思うなよ。話をつけようじゃないか。早く入って来い」とすごまれる光景を想像し、逃げ出したくなった。やがて、エレベーターが止まり、ドアが開いた。部屋まで続く廊下がとても長く感じられた。やはり、路子の忠告を思い出した。恵美はドアを開け、明かりをつけた。それはワンルームマンションだ。怖いお兄さんは隠れてなさそうなのでホットした。小奇麗で女の子の部屋らしい雰囲気がある。

小さなテーブルにつくように促され、座ると恵美は冷蔵庫から缶コーヒーをふたつ取り出し、テーブルに置くと慶太郎と向き合うように座った。缶コーヒーを両手で包むように持っていたが、その缶に目を向け、話し出した。

「さつき、話したけど、私、夫を捨てて、年上の男に熱を上げたの。その人、当然、奥さんがいたわ。悪いと思いつながら、奥さんのいる人を好きになったのよ。どうしようもない女なの」

「……」

「あの小説の会で貴方を見て、ビーンって感じで電気が走ったみたいになったの。一目惚れね。貴方には奥さんがいるでしょ。そんなことはどうでもよくなるの。これって、遺伝なのよ」

「どういうことですか。遺伝って」

「私は父を小さい頃になくしたの」

「さつき、そう言っていましたね」

「どうして死んだか、分かりますか」

「病気か、何かですか」

「殺されたのよ。ヤクザに」

「どういうことですか」

「父は、建設会社で営業をやっていて、よくお客を接待して高級クラブを利用していたらしいの。会社も交際費をふんだんに出したのでしょね。派手に遊んでいたようです。しかし、営業マンとしては優秀だったらしいの。それが、あるクラブのママを一目見て夢中になったのです。所謂、一目惚れ。そのあとだったか、母に『なぜだか分からないが、俺は以前の俺と違うようだ。どうしても抑えきれないものがある』と言ったらしいわ」

「それでどうしたの」

「会社の金を使って、そのクラブに入りびたり。その女の人も父に惹かれてたのかもしれないけど。父は家庭を捨てて同棲を始めたわけ」

「それは穏やかじゃないですね」

「悪いことに、そのママは暴力団の幹部の女だったのよ」

「それはまずいですね」

「父と同棲中に、死因はよくわからないけど、その女の人が死んだの」

「……」

「その暴力団の幹部の人はママを随分と可愛がっていたみたい。それで父との関係がばれて、逆上したらしくて、手下に命じて父を拳銃で撃ち殺させたの。てつきり、父が女を殺したと思ったのね」

「そんなことって本当にあるのですね」

「私はまだ小さかったのでその時はなぜ父が突然いなくなったのか分からなかった。その時、母は『パパは遠い所に行ったの』というだけだった。この話は大きくなってから母から聞いたの」

「ほう、それはびっくりしたでしょうね」

「母が『貴方はパパにそっくり。それで大人になってパパのように突然、ある男に一目惚れして、その男のところに行くのでしよう。なにもかも捨てて、ひとりの男に夢中になるわ。とても心配。その男も貴女も不幸になるのよ。ママにはそれが分かるの』と言ったの」

「お母さんは、貴女をひとりで育てたの」

「そう、私を女ひとりで育ててくれた。そして私は母の勧めてくれた人と結婚したわ。私の結婚を見届けてほっとしたのか、それからしばらくして死んだわ。もう三年になるかなあ」

「それはお気の毒でしたね」

「結婚してからは母に心配をかけないようにと夫以外の男の人をなるべく見ないようにしてきたわ。実際は無理な話だけれどね」

「随分、苦労したんですね」

「やはり無理だったわ。父の亡霊が出たの。話したように夫以外の男の人を好きになつたの。父と同じように家庭を捨てて、その男の人のところに走つたの」

「それで、その男とは今は」

「その男は死んだわ。私と付き合い出してね。家庭との板挟みだったのでしょうね。私と一緒に寝てた時。朝、起きたら、隣ですっかり冷たくなっていて、びっくりして救急車を呼んだわ。もう手遅れで死因は心臓麻痺だった。不審死だったので警察に呼ばれているいろと訊かれたわ。私が殺したのではと疑われたわ。しまいには疑いは晴れたけど」

「ぼつり、ぼつりと思ひ出すように恵美は話した。

「辛かったらうね」

「そうしたら、しばらくして母が夢に出てきたの。こういうの『やっぱり相手の男は死んだのね。パパの時と同じよ。このままだと今度は貴女が死ぬことになるわ。貴女の前に一目惚れするような男が再び現れるわ。そうしたらその人に洗いざらい今までのことをすべて打ち明けなさい』って」

「そういうお告げが夢のなかであつたのだね」

「そこに現れたのが貴方だったの」

恵美は潤むような目をして言ったのだった。

「貴女のようなチャーミングな人にそう思われるのはうれしいけど……」

慶太郎は恵美に一目惚れされたのはいいが、同時にこの女が過去に付き合った男と同じ運命、すなわち、不幸な死に方をするかと思うと身震いした。

「ちよつと、失礼」

と言って恵美はトイレに駆け込んだ。

なかなか出て来ない。女のトイレは長い、と思つて待つていた。

恵美はトイレから出てくるなり、平気な顔をして言った。

「あれが始まつたみたい」

慶太郎は一瞬、なんのことか分からなかったが、あれか、と理解した。「私たち、せつかく盛り上がつてこれからつてところで、生理なんかになつちやつてごめんなさいね」

慶太郎は、これは一夜をともにすることをやんわり断るサインだ、ここで強引に迫ることは止そうと思つた。そうなると恵美のところに泊まるわけにもいかない。スマホを取り出し、タクシーを呼んだ。

慶太郎は車のなかで、今日のことはすべて夢ではなかったのかと思つた。ほおを抓つたが夢でなかった。一目惚れした恵美からの誘いを待つことにした。いや、こちらから誘つてやったほうが喜ぶかもしれない。しかし、深入りはしないようにしよう。前の男のように死にたくはなかった。「さつき会」に出す作品の締め切りが近付いてきたが、恵美のことで頭が一杯で構想がなかなかまとまらない。仕方ないので今泉耕作の作品のなかから選んだものを半ば盗作するように書き上げてメールで会員の皆に送つた。

二、三日して、恵美からメールで送られてきた作品を読んで愕然とした。なんと、あの日の恵美と慶太郎のやり取りがそっくり、そのまま書かれていてはないか。まるで、ビデオを見ているようだ。「あの話はすべて創作だったのか」とキツネにつままれたようだ。しかも、誘いのメールを受け取つて、ほくそ笑む男の姿も書いてある。顔から火が出るほど恥ずかしかつた。「さつき会」に行くのが怖くなつた、

恵美は女子大時代から小説を書くことを趣味としていたが、知人に紹介されて「さつき会」に入会した。前回、メールで送られてきた小川慶太郎の作品を読んで唾然とした。積年の恨みのある小川路子、いや、今は坂本路子の父親が

この作品を書いたのだと知ったのだった。路子の旦那は国際線のパイロット、名前は翔太、さらに翔太の父は出版社に勤務していたとある、間違いない。翔太はかつて恵美の恋人だった。翔太は恵美と別れて路子を選んだのだった。翔太に恨みはないが路子は許せない。『娘の路子が一人娘の紗香を抱いて出迎えた』との下りを読んで、翔太の子を路子が生んだことを知ってかっとなった。復讐の手始めに父親の慶太郎に恥をかかせようと、芝居を仕組んだのだった。もしマンションの部屋で乱暴しようとしたら、警察に突き出してやろうと防犯カメラを回していたがその必要はなかった。

しばらくして慶太郎のところへ路子がやってきた。

「この前、女子大の同窓会があったので、紗香をお母さんに預けて久しぶりに出てきたの」

「面白い話でもあったのか」

『さつき会』に入った子、お父さんが会ったという柏木さんも出てたよ」

「でも、お前はあまり親しくないんだろう」

慶太郎は探りを入れるために、恐る恐る訊いた。

「それが、にこにこして親しそうに話しかけてくるの。びっくりしたわ」

「ほう、どうしたんだらうね」

『どんな人だろうと興味があったので貴女のお父さんとデートしたわ』って言うってた」

慶太郎はなぜ、そんなことまでしゃべったのかと思った。

「食事をしたただよ」

「あの子と付き合うのよしたほうがいいよ。同級生仲間でもあんまり評判がよくないの」

そして、付け足すように言った。

「そうそう、嘘か本当か知らないけれど、近々結婚するって言ってたわ」

路子は慶太郎を出来るだけ恵美から遠ざけたかった。慶太郎に「さつき会」への入会を勧めたことを後悔している。まさか、そこで恵美と慶太郎が出会うとは思わなかった。翔太のことだけれど、恵美は路子が横取りしたと思ってるだろうが、翔太も恵美とは性格と合わなかったようなので、路子が横取りしなくてもじきに別れていただろうと考えていた。

ぼんやり、そのようなことを考えている路子を見て、慶太郎は言った。

「なにか、考えているの」

「いや、別になにも」

さつき会でもにもういかないと決心した慶太郎がいた。行かないと小説書きに熱が入らない。また趣味探しだ。

(了 11126字)